

明治から昭和の半ばにかけ、ダンディズムを象徴する絶対的アイテムだったものといえは帽子だろう。大正昭和初期の写真や映像を見ると、男性のほとんどが帽子をかぶっており、無帽の人はごくわずか。冠帽率(帽子着用)は90〜95%ともいわれ、夏は清涼感のある Panama 帽やカンカン帽が大流行した。現在は帽子をかぶる人は少数派となつてしまつたが、エレガントな雰囲気漂わせる Panama 帽の人氣は根強く、流行に左右されないファッションコーデの決め手として支持されている。

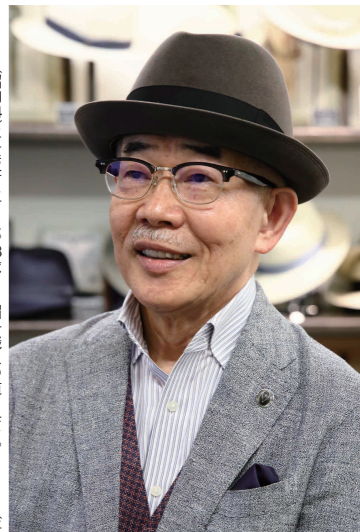
Panama 帽は、南米・エクアドルで自生しているヤシの木の種類、トキヤ草で編んだ帽子を指す。赤道に近いエクアドルでは強い日差しを避けるため、身近に生えているトキヤ草で帽子を手編みする技術が確立され、産業として発展。Panama ハットは Panama 港から各地に輸出された。20世紀初頭、アメリカ大統領のセオドア・ルーズヴェルトは建設中の Panama 運河の視察に訪れた際、Panama 帽をかぶつた。その写真が全世界に配信されたことから、ニュースソースになぞらえ、またたく間に Panama 帽の名前が知れわたり、定着した。

そんな Panama 帽に特化した希少な製帽所が大阪市内にある。創業130年の西川製帽株式会社だ。「植物を編んで帽子にする文化は世界中に存在しますが、軽くて涼しく、もつとも上質な帽子とされるのがトキヤ草で編んだ Panama 帽なんです。トキヤ草はバナナの葉のように大きくて立派なため、葉っぱばかりが目立ちますが、葉の裏側についている茎部分が重要で、ここが Panama 帽の原材料になるんです。私は帽体(帽子の原型)がどのように作られているか知りたくて、現地の村を訪ねたことがあります。茎を細く裂き、長い時間をかけてしなやかな繊維に仕上げ、丁寧に手編みするテクニックはまさに世界文化遺産(2012年にユネスコ世界無形文化



帽子職人

# 西川文二郎さん



1949(昭和24年)大阪府生まれ。18歳より帽子職人の道へ歩み、1999平成11年 BUNJIRŌ W ブランドを立ち上げ、2015年に本店舗文二郎帽子店をオープン。帽子のよく似合う店主文二郎さんのアドバイザーには定評がある一職人として未だ100%の満足感はありませんがい帽子ができたときはうれしいものです。

写真左上/大人の隠れ家のような落ち着いた店内に作られた Panama 帽がずらりと並び、比較誰でも似合いやすいのがツマミやベーンシックで丸い形の日本人の頭にぴったりという、スジイリは和服にもおススメ。写真左下/店主の西川文二郎さんが2年前に立ち上げたレディースブランドの「Amana」の飾きのこないシンプルをデザインが人気。



写真上/ Panama 帽の帽体。繊維の細かさなどによって帽体のグレードが異なる。エクアドルなどで熟練職人は1つの帽体を編み上げるのに約1週間、「モンテクリスティ」と呼ばれる最高級品では3か月ほどかかるという。



写真上右/型は時代にマッチしたフォルムや大きさなどによって種類が増え続け、代々受け継がれてきた。鋳物の金型は30kg近くあり、これを持ち運ぶのも一苦労だ。写真上左/ブロッッキングのようす。

写真右/型入れの準備のようす。帽体は蒸気をあててやわらかくしてから金型に入れ込み、熱と水圧でプレスする。写真左/ツバの成形。「スナップブリムやハイバック、オールアップなどツバの角度にはさまざまな種類があり、同じクラウン型でもツバが少し変わるだけで帽子の表情が違ってきます」(文二郎さん)



文二郎帽子店  
大阪市天王寺区上汐6-1-1 K1ビル1F  
TEL. 06-6796-8070  
営業時間 13:00 ~ 17:00 (定休日/月・火曜日)

## 伝統工芸の技にさらに磨きをかける 熟練の手仕事が生み出す、Panama 帽



現在、帽体のプレスを担当するのは綾さんのご主人でガーナ人のワハブ・アラハッサンさん。アパレル関係の仕事から帽子職人に転向した。指導する文二郎さんは言う。「その昔、父親から一人前の帽子職人になるには10年かかると言われましたが、ワハブは5年でマスターしました。ものすごく呑み込みが早いので、びっくりしましたね。130年続く帽子作りの経験と高い技術、厳選した天然素材によってみなさまに愛される Panama 帽をこれからもお届けしたいと思っております」

化遺産に登録されている)の名にふさわしいすばらしい伝統工芸で、深く感動しました。そのような芸術品がパトナタッチされ、Panama 帽に仕上げさせてもらうことに大きな責任と誇りを感じましたね」と4代目の西川文二郎さんは言う。

文二郎さんの手元には初代・西川仁平氏の古い肖像写真が残されている。「日本で Panama 帽が流行り出した明治時代、西川仁平が単身でハワイに渡り、Panama 帽の製作技術を身につけたと聞いています。明治27年、神戸の元町で西川屋帽子店を創業し、既製品の販売やオーダーメイドにも対応してました。旧居留地に近かったので、さぞかし外国人観光客でにぎわったことでしょう。令和の時代になつても、弊社では戦前から使っているプレス機や昔ながらの道具を用い、熟練の職人による手仕事で Panama 帽を作っています」

### この夏、Panama 帽でクールにおしゃれを

帽体はそのままでも帽子としてかぶれる形をしているが、まだ素材にすぎない。これをもとに型入れなどの加工を施し、ダンディな Panama 帽に仕上げていく。工程はこうだ。まず、ブロッッキングといって帽体を整える作業を行う。「緻密な編み目ですが、天然素材を人の手で編んでいるため、どうしても個体差があるんです。それを修整するため、木型にはめて下から蒸気をあて、クラウン(頭部を覆う部分)を均一にします。型入れ加工は計3回行います。鋳物の金型に帽体をセットし、蒸気を吹きつけます。蒸気機関車のような勢いで蒸気を飛ばすので、あたり一面に湯気が漂います。冬はいいのですが、夏場は室温が40度以上になることも。ふつと意識が飛びそうになりますが、集中力を切らさないよう気をつけたいといけません。圧力をかけすぎると編み目がつぶれてしまい、かといって圧力が弱いと型がつきにくく、

油断すると破れる場合もあるからです。まずは基本的に忠実に、長年の経験で時間と圧力を判断します。高級な帽体の場合は祈る気持ちです(笑)」

1回目の型入れ後、ツバの裁断と処理をし、2回目の型入れを行う。そのあと糊づけ加工に進む。「液体糊に帽体をジャブソと浸けこみ、攪拌機にかけて糊を飛ばし、乾燥させます。この作業を3回繰り返して、型を固定させます。糊づけしないと次第に型が崩れ、元に戻ってしまふんです。締めくくりとして3回目の型入れを行い、クラウンの形がピシッと決まります。帽子の内側(額が当たる位置)にピン皮、またはスベリと呼ばれるテープ状の布をぐるりと縫いつけ、型入れの最終プロセスであるツバの成形を行う。小石が入った約30kgの重しを鉄板で熱し、それを帽体にセットし、ツバの角度を成形する。リボン縫いつけ、頭頂部内側にマークをつけられ、ようやく完成となる。

「Panama 帽は夏の帽子なので、シーズンの半年前から製作にかかります。既製品は年末から生産を開始し、個人のお客さまのオーダーは春ごろから増えていきます。紫外線が強くなるゴールデンウィークあたりからかぶっていただいたいですね。かつて、成人男性のたしなみとして誰もが憧れた Panama 帽でしたが、乗り物の発達などで頭部を保護することが少なくなり、またヘアスタイルの多様化によって帽子の必要性が低くなってしまいました。しかし職業柄かもしれないが、いくら素敵なスーツや靴を身につけたとしても、トップに帽子がないと物足りない気がします。男振りの決め手が帽子ではないでしょうか。とくに Panama 帽をかぶるとすつと背筋が伸び、立ち振る舞いが違ってきます。自分分は帽子が似合わないと言いますが、引き立ててくれる帽子は必ず見つかります。帽子愛好家が増えてくださるよう、質の高い帽子作りに励んでいきたいですね」